

Characterization of IgG4 anti-neurofascin 155 antibody-positive polyneuropathy

緒方, 英紀

<https://doi.org/10.15017/1654703>

出版情報 : 九州大学, 2015, 博士 (医学), 課程博士
バージョン :
権利関係 : 全文ファイル公表済



(別紙様式 2)

氏 名	緒方 英紀				
論 文 名	Characterization of IgG4 anti-neurofascin 155 antibody-positive polyneuropathy				
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	飛松 省三	
	副 査	九州大学	教授	岩城 徹	
	副 査	九州大学	教授	飯原 弘二	

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

目的：慢性炎症性脱髄性多発ニューロパチー(CIDP)における抗 neurofascin155 (NF155)抗体の陽性率を検討し、抗 NF155 抗体陽性 CIDP の特徴を明らかにする。

対象・方法：2004 年～2014 年に九州大学病院神経内科を受診した EFNS/PNS 電気生理学的診断基準で確実な CIDP 50 例において、フローサイトメトリーを用いた cell-based assay 法で抗 NF155 抗体を測定した。多発性硬化症 (MS)32 例, Guillain-Barré 症候群 (GBS)/Fisher 症候群 26 例を含む CIDP 以外のニューロパチー (ON)40 例, 健常対照 (HCs)30 例でも同様の測定を行った。他施設症例 4 例を含む合計 13 例の抗 NF155 抗体陽性 CIDP 症例で臨床的特徴を解析した。

結果：抗 NF155 抗体の陽性率は CIDP 18.0%(9/50), MS 0%(0/32), ON 2.5%(1/40), HCs 0%(0/30)であった。抗 NF155 抗体陽性 CIDP 症例における同抗体の IgG サブクラスはいずれも IgG4 優位であった一方で、同抗体弱陽性であった 1 例の GBS 症例は低力価の IgG1 抗体を有するのみであった。抗 NF155 抗体陽性 CIDP13 例を陰性 CIDP 41 例と比較すると、平均発症年齢が 25.2 歳と有意に若く、遠位対称型である割合と下垂足、歩行障害、振戦を有する割合が有意に高く、脳脊髄液中の蛋白量が有意に増加していた。神経伝導検査では抗体陽性群は陰性群より遠位潜時および F 波潜時が有意に延長していた。MRI neurography で確認し得た 7 例の抗 NF155 抗体陽性 CIDP 全例において、頸部・腰仙骨部神経根および近位末梢神経が対称性に肥厚し、抗体陰性群と比較して有意差を認めた。陽性症例 2 例の腓腹神経生検所見ではいずれも神経周膜下の肥厚が著明で絞輪部周囲の脱髄を少数認めたもののオニオンバルブの形成や炎症細胞浸潤は認めなかった。抗 NF155 抗体陽性 CIDP13 例を治療反応群と抵抗群に分類した場合、大量免疫グロブリン療法に加えてステロイドを併用している割合が治療反応群で有意に高かった。

結論：抗 NF155 抗体は遠位部優位の障害が目立ち、神経の肥厚を伴う CIDP の一群において陽性となる。

以上の成績はこの方面の研究に知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが、いずれについても適切な回答を得た。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定した。